

# 北陸地方における方言景観の特徴

## A Specific Feature of Dialect Landscapes in The Hokuriku Region

加藤和夫

金沢大学名誉教授

**Abstract:** While the decline of dialects as everyday language has been continuing nationwide in Japan, the use of dialects has been re-evaluated since the 1980s, various cases of dialect conjugation other than everyday language have come to be recognized. In the Hokuriku region, people allegedly tend to a strong inferiority complex concerning their dialect, because of which they have been supposed to be reluctant to use dialects for everyday reasons, and in fact their dialects have been declining so rapidly. Even in this region, the dialect landscape has gradually enlarged in the last 20 years or so. In this paper, the dialect landscape is divided into “dialect signboard/dialect catch copy” and “dialect naming/dialect goods.” The author collected them at major points including the capital cities of the three Hokuriku prefectures from 2016 to 2018 and, based on this data, examines the relationship between the quantitative differences between these 300 dialect landscapes and the dialect consciousness behind them, as well as the characteristics of the dialect forms and meanings included in the dialect landscapes.

**Key words:** Hokuriku region, dialect landscape, dialect consciousness, -massi, -re/rare, -ne:

### 1. はじめに

社会言語学の研究テーマの一つに言語景観研究がある。

「言語景観」(linguistic landscape)とは、庄司/P・バックハウス/F・クルマス編著(2009)『日本の言語景観』(三元社、p.9)によれば、カナダの社会言語学者 R. Landry & R. Y. Bourhis (1997)によって「特定の領域あるいは地域の公共的・商業的表示における言語の可視性と顕著性」と定義され、言語景観を多様な角度から考察することによって、ある社会の言語的状況との関わりを理解しようとするものである。

そのような言語景観研究において、「言語」を「方言」に置き換えた方言景観研究がある。全国各地の方言は生活語としての方言の衰退が全国的に進行しつつある一方で、1980年代頃から方言の再評価が進む中、生活語以外で様々な方言活用の事例が見られるようになり、その一部として

全国的な方言景観（方言看板、方言キャッチコピー、方言グッズ等）の増加が先行研究で指摘されている（井上・大橋・田中・日高・山下（2013）『魅せる方言 地域語の底力』三省堂など）。比較的方言コンプレックスの強い地域とされ、方言の衰退も速く、従来から方言景観の利用にも消極的だったと考えられる北陸地方も例外ではなく、ここ20年余りの間に徐々に方言景観が増加しつつある。

本稿は、筆者が2016～2018年度の3年間、「北陸地方の方言景観に関する社会言語学的研究—方言景観の多様性とその要因解明—」の研究課題で科学研究費を得て、北陸三県の県庁所在地である石川県金沢市、富山県富山市、福井県福井市を中心とした各県の主要地点で収集した300例余りの方言景観（その後、追加で収集した方言景観を含む）について、言語景観研究の観点からその実態を明らかにするとともに、その活用方法を大きく二種（「方言看板・方言キャッチコピー類」と「方言ネーミング・方言グッズ類」）に分類し、北陸三県の方言景観の数量的差異とその背景にあるもの、さらに方言景観に含まれる方言の形式・意味の特徴について考察するものである。

## 2. 日本の言語景観（方言景観）研究

日本の言語景観研究は社会言語学における研究テーマの一つとして1990年代後半に導入された。国立民族学博物館の庄司博史氏を中心とした共同研究がその嚆矢とも言えるもので、庄司博史/P・バックハウス/F・クルマス編著（2009）でその成果を見ることができる。そこでは西欧化・国際化・多民族化などに関わる言語景観に注目して、多言語化と言語景観、経済言語学からみた言語景観、看板表記と地域差、地下鉄案内板にみるローマ字表記、言語景観の行政的背景、視覚障害者にとっての言語景観、言語景観における移民言語、などの多彩なテーマが扱われている。庄司らの研究に刺激を受けた研究に、内山純蔵監修/中井精一、ダニエル・ロング編（2011）などがある。

一方、言語景観でも方言景観に注目した論考に日高貢一郎（1996）、井上史雄・大橋敦夫・田中宣廣・日高貢一郎・山下暁美（2013）、田中宣廣（2016）、井上史雄（2021）などがある。中でも三省堂の辞書総合ウェブサイト Sanseido Word-Wise Web での連載「地域語の経済と社会」の第1回（2008年6月）～第174回（2011年10月）から抜粋、単行本化された井上・大橋・田中・日高・山下（2013）『魅せる方言 地域語の底力』が注目できる。そこで扱われている方言活用例（本稿で扱う方言景観以外のものも含む）には、方言エール（東日本大震災復興の方言エール等）、方言メッセージ、方言でもてなし（方言観光キャッチコピー等）、おいしい方言（「でらうみゃあ」等）、方言看板・ポスター（方言の交通標語等）、方言ネーミング（方言名の公共施設等）、方言パフォーマンス（方言CM、方言自販機等）、方言みやげ（方言手ぬぐい、方言Tシャツ、方言かるた等）、方言グッズ（方言ソング、方言のし袋等）、海外の方言グッズ等があるが、生活語以外の部分で方言景観を含む多彩な方言活用例が全国的に多く存在をすること、また方言活用例の多少と地域性の関係、活用目的の多様性について知ることができる。

### 3. 明治時代以降の方言意識史

本稿で生活語以外の部分での方言活用例としての方言景観について見ていく上で、方言景観が存在する地域の人たちの方言意識との関わりを確認しておくことが重要と考える。そこで、北陸三県での方言意識に言及する前に、真田信治（1987）pp.73-105、加藤和夫（2007）pp.279-287の記述に基づきながら、我が国における明治時代から現在までの方言及び方言意識をめぐる動きを確認しておきたい。

#### 3.1 明治時代から戦前の方言をめぐる動き

まず、明治時代から戦前までの方言をめぐる動きを概観する。

江戸時代の強固な幕藩体制を背景とした約260年間は、農民を中心とした人の動きが藩域という社会的条件の制約のもとに固定されたため、方言の地域差が大きくなり、全国に豊かに方言が花開いた方言にとって幸せな時代だったとされる。

しかし、明治時代になって幕藩体制が崩壊すると一転、天皇を中心とした中央主権国家の確立、国家統一が目指されることになり、明治20（1887）年前後からことばの統一の必要性、つまり標準語制定の必要性が、当時の東京帝国大学博言学科教授・上田万年を中心に唱えられることとなる。明治35（1902）年に上田の進言に基づいて文部省に設置された国語調査委員会（委員長：加藤弘之、委員に上田万年ら12名）の四つの調査方針の一つに「方言ヲ調査シテ標準語ヲ選定スルコト」があり、翌年初めて全国規模の音韻と口語法に関する方言調査が実施された。

その後、口語法の調査結果も含め、首都となった東京のことばが標準語としての地位を固めることになる。明治37（1904）年からは最初の国定教科書である『尋常小学読本』が全国の小学校で使用され、標準語教育が押し進められることになる。結果、学校教育の場で方言を「悪いことば」「使ってはならないことば」と位置づけることになり、「方言撲滅」「方言矯正」の動きが盛んとなった。沖縄などでは方言撲滅の成果を上げるための極端な指導として、方言を使用した児童・生徒に「方言札」を首から下げさせるなどといったことまで行われ、この時期の標準語教育は地域の人々に方言コンプレックスを植え付けることとなった。

#### 3.2 戦後の方言意識をめぐる変化

明治時代末からの方言撲滅の動きは、戦前は言うまでもなく、戦後も1960年代まで続いていた。高度経済成長期の中央（東京）志向は標準語（共通語）万能主義の時代でもあった。この時期に石川県の美川町で刊行された『美川町文化誌』（1969年）の方言の章の冒頭には「使用する方言の多少は、教育の普及や文化の変遷を知るバロメーターであるといっても過言ではない。一日も早く方言の使用が少なくなるよう、お互い努力したいものである。」（下線筆者）とあり、方言撲滅の考え方が戦後も根強く続いていたことを示している。

その後、「方言再発見期」とも言える1970年代～1980年代になると、東京一局集中への反省か

ら〈地方の時代〉と言われるようになり、地方の見直しとともに方言の見直しが進み始めた。それは同時に、昭和30年代後半からのテレビの普及を中心とした社会環境の変化によって方言が衰退に向かっていったことへの危機感を意識し始めた時期でもあったと言える。

そして、21世紀を目前にした1990年代になると、全国的にさらに方言の豊かさ、価値・役割などへの気づきが進み、方言衰退の動きにややブレーキがかかるとともに、それぞれにふさわしい場面で共通語と方言を使い分ける「方言と共通語の共生期」に入ったとされる。

以上、明治時代から現在までの方言及び方言意識をめぐる動きをごく簡単に振り返った。全国的に方言の見直しが進む現在、北陸三県での方言意識はどのような状況にあるだろうか。次節では、方言景観との関係を考えるために、筆者が以前関わった北陸地方での言語意識調査の結果から、金沢市を含む北陸三県の県庁所在地での方言好感度を中心にその差異について見ておく。

#### 4. 北陸三県の方言意識を比較する

筆者は1994年秋から1995年春にかけて、全国の13名の方言研究者とともに14都市における言語意識調査を実施した。その調査報告書とも言える言語編集部（1995）と佐藤和之・米田正人編著（1999）の執筆に関わり、また、その後の北陸三県出身の卒業論文指導学生3名による各県3地点での言語意識調査の結果が見えてくる中で、全国14地点言語意識調査で筆者が調査を担当した金沢市を含む北陸三県ネイティブの、自らの方言に対するコンプレックスに近いネガティブな感情の強さを意識するようになった。

上記調査から20年近くが経過した現在、本稿で扱う北陸三県での方言景観の現状の考察に、そのような方言景観を生み出している人々の方言意識についても概観しておくことは重要だろう。

##### 4.1 北陸三県県庁所在地の方言好感度比較

図1はNHK放送文化研究所の『データブック全国県民意識調査1996』に載る方言関連項目のデータを整理・紹介している柴田実（2001）に載るものである。「あなたは、地方なまりが出るのは恥ずかしいことだと思いますか」という問いに対して、「そう思う（はい）」という答えの全国平均13%に対して、それよりも「かなり高い」「差なし」「かなり低い」の三グループに分けた場合、北陸三県はいずれも「かなり高い」のグループに属することがわかる。

むろん「かなり高い」が北陸三県だけというわけではなく、東北地方や北関東、新潟県、岐阜県、そして

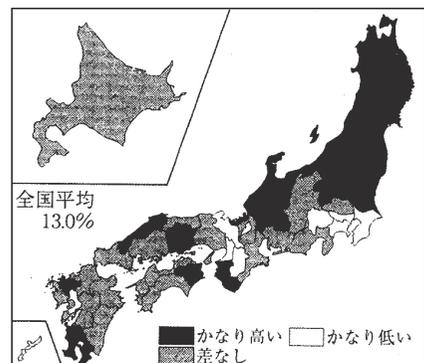


図1 あなたは、地方なまりが出るのは恥ずかしいことだと思いますか。

(1. はい)

西日本のいくつかの県にも見られるが、全国 47 都道府県の中で「そう思う（はい）」の回答率が最も高かったのが筆者の出身県でもある福井県であった。福井県の 26.9% は全国平均の 13% の約 2 倍であり、石川・富山両県（石川県は 20.9%、富山県は 18.4%）と比較しても高く、方言区画的に近畿方言に含まれる敦賀市以南の嶺南地方を除いた嶺北地方だけの回答率はさらに高い 28.9% となり、県庁所在地の福井市を含む嶺北地方の人々の方言に対するマイナス意識が浮き彫りとなった。また、この結果からは、全国的に見て北陸地方が自分たちの方言を「恥ずかしいと思う」「好きになれない」人の多い地域であることが見えてきた。

#### 4.2 方言好感度の全国（16 地点）比較の中の北陸

本節の冒頭でも言及した全国 14 地点言語意識調査で対象とされた都市は、北から札幌、弘前、仙台、東京、千葉、松本、金沢、大垣、京都、広島、高知、福岡、鹿児島、那覇である。この調査から 25 年ほどが経過して、やや古いデータではあるが、その後、同じ調査項目・方法で全国を見渡せる言語意識調査は行われていないので、本稿でもその結果を適宜参照することとする。

全国 14 地点言語意識調査の結果をもとに最初に刊行された言語編集部（1995）に載る加藤和夫（1995）では、金沢市の男性ネイティブ 3 世代（高校生・活躍層〈25～40 歳〉・高年層〈60 歳以上〉）の言語意識について第一次の分析を試みたが、この内容に興味を持った筆者の卒業論文指導学生 3 名が金沢市との比較を目的として、それぞれの出身県で同じ項目、同じ被調査者の条件（ネイティブ 3 世代の男女 25 名ずつ）で調査を実施し、卒業論文を執筆した。調査地点は、三谷真須美（1997）が福井県の福井市・勝山市・小浜市、谷沢香織（1998）が富山県の富山市・高岡市・魚津市（高校生のみ）、諸谷志奈子（2000）が石川県の金沢市（筆者の調査との比較のため女性 50 名）・穴水町・小松市であった。

ここでは、先の NHK の調査結果も踏まえつつ、全国 14 地点言語意識調査の結果と筆者の指導学生 3 名の調査結果から、自分の方言が好きかという項目について、他の 13 地点と比較しての北陸三県の県庁所在地（金沢市、福井市、富山市）の方言好感度について考察する。

図 2、図 3 は金沢市、福井市、富山市におけるネイティブの方言に対する好感度（「あなたは〈金沢・福井・富山〉弁が好きですか」に対する回答）と、地域に対する好感度（「あなたは〈金沢・福井・富山〉が好きですか」に対する回答）を世代別に示したものである。

図 2 では、とりわけ福井市における「好き」の回答率の低さ、「嫌い」の回答率の高さが目立つ。加藤（1995）では、全国 14 地点の中で金沢市の「好き」の回答率が、大垣、千葉に次いで低いこと、北陸の中核都市である金沢市ネイティブの方言への好感度・愛着度が全国的に見て低いことを指摘したが、富山市、福井市がさらにそれを下回る結果となった。その順序は先述の NHK 調査の「地方なまりが出るのは恥ずかしいと思うか」の問いに対する回答率とも照応する。そして、図 3 の地域好感度の結果と比較すると、金沢市は地域好感度が極めて高いのに方言好感度は高くない街、福井市は地域好感度も方言好感度も低い街、富山市は両意識ともその中間に位置す

る街ということがわかった。

福井市ネイティブの自分の方言に対する好感度の低さの背景には、図3に見える地域に対する好感度の低さとともに、福井市を中心に北の坂井市、南の鯖江市、越前市とその周辺地域という福井県嶺北地方の人口集中地域に分布する無アクセント（語や文節にアクセントの決まりがない）という特徴が影響していると考えている。無アクセント地域の人たちは一般に抑揚が無く平板な話し方になりやすいが、そうしたアクセントの特徴を自覚している人は少なく、形だけ共通語にすれば問題ないと思っている人が多い。そこで、他地域の人から話し方に特徴があることを指摘されてもその理由がわからず、筆者が言う「謂われなきコンプレックス」を感じている人が多いのである。

全国14地点言語意識調査に福井市、富山市を加えた16地点での「自分の方言が好き」の3世代平均回答率を高い順に並べると次のようである。

1位：松本（85%）、2位：那覇（83%）、3位：弘前（75%）、3位：福岡（75%）、5位：札幌（66%）、6位：高知（64%）、7位：鹿児島（61%）、8位：広島（60%）、9位：京都（57%）、10位：仙台（53%）、10位：東京（53%）、12位：金沢（44%）、13位：千葉（37%）、14位：富山（30%）、15位：大垣（29%）、16位：福井（20%）

上記の順位からは、全国的に見た場合の北陸地方ネイティブの人々の自分の方言に対する好感度の低さが改めて見えてくるのである。1980年代から1990年代にかけて全国的に方言の見直しが本格化し、生活語以外の部分での方言活用も進む中、北陸地方でそのような動きが低調だった背景には、図2に現れているような方言好感度の低さが影響していたと考えるのも、あながち的外れとは言えないだろう。

なお、宮下梨乃（2016）では、県庁所在地の福井市における三谷（1997）の調査から約20年を経過しての言語意識の変化を明らかにしているが、先に見た方言好感度（「あなたは

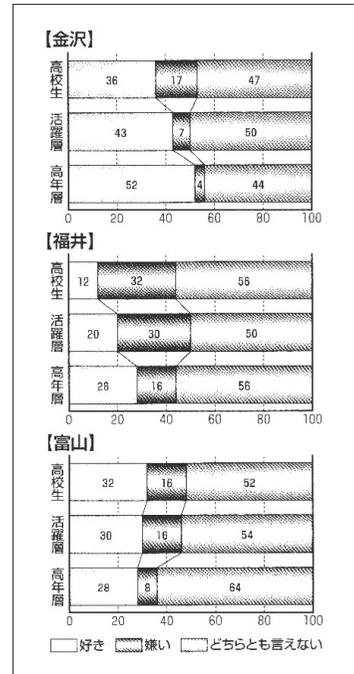


図2 方言好感度（金沢市・福井市・富山市）

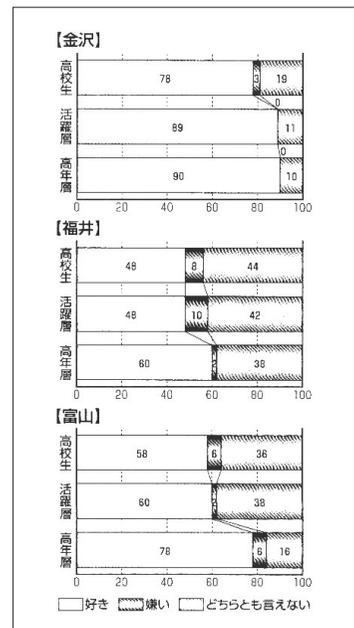


図3 地域好感度（金沢市・福井市・富山市）

〈福井〉弁が好きですか」の問いへの回答)については、「好き」の回答が高校生で18ポイント、活躍層で40ポイント、高年層で26ポイント増加しており、北陸三県の県庁所在地の中では「好き」の回答率が最も低かった福井市でも好感度のアップが確かめられた。ただし、福井市でこの結果ということは、他の地点での好感度もアップしていることが予想され、相対的な順位には変化がないのではないかと予想している。

## 5. 北陸三県の方言景観から見えてくるもの

### 5.1 北陸の方言景観調査

比較的方言コンプレックスの強い地域とされ、方言の衰退も速く、従来から方言景観の利用にも消極的だったと考えられる北陸地方でも、最近では徐々に方言景観が増えつつあることから、筆者は2016～2018年度の3年間、科学研究費補助金を得て北陸三県の県庁所在地である石川県金沢市、富山県富山市、福井県福井市を中心とした各県の主要地点での臨地調査によって方言景観を収集した。本稿では、調査の結果収集できた300例余りの方言景観について、その活用方法によって大きく二種(「方言看板・方言キャッチコピー類」と「方言ネーミング・方言グッズ類」)に分類し、北陸三県でのそれらの数量的差異と方言景観に含まれる方言の形式・意味の特徴について考察する。

なお、3年間に収集した方言景観については、研究成果報告書として加藤和夫編(2019)『北陸地方の方言景観《資料集》』(全101ページに319の方言景観写真を収める)を作成した。

### 5.2 北陸三県の方言景観数の比較

北陸三県で収集した319の方言景観を「方言看板・方言キャッチコピー類」と「方言ネーミング・方言グッズ類」に分けて県ごとに数量を比較したものが下の表である。「方言看板・方言キャッチコピー類」とは、「方言看板」が看板や垂れ幕などに方言の文や語句が載っているもの、「方言キャッチコピー」が看板や垂れ幕といった形状以外の場所で、見る人に方言の文や語句で呼びかけたり、誘ったりしているものを指す。一方、「方言ネーミング・方言グッズ類」とは、「方言ネーミング」が土産物などの品物や施設などに方言で名付けが行われているもの、「方言グッズ」が方言手ぬぐい、方言のれん、方言湯呑み、方言ネクタイ、方言スタンプといった類いを指す。

表からは、全319例のうち石川県が199例で全体の3分の2近く(62%)を占め、富山県、福

表 北陸三県における方言景観数

|                | 石川県       | 富山県      | 福井県      | 計   |
|----------------|-----------|----------|----------|-----|
| 方言看板、方言キャッチコピー | 109 (64%) | 32 (19%) | 28 (17%) | 169 |
| 方言ネーミング、方言グッズ  | 90 (60%)  | 26 (17%) | 34 (23%) | 150 |
| 計              | 199 (62%) | 58 (18%) | 62 (20%) | 319 |

井県に比べて圧倒的に多いことがわかる。加藤が石川県在住であることで富山・福井両県に比べて石川県の方言景観を目にする機会に恵まれていることも多少は影響しているかもしれないが、それでも石川県の景観数の圧倒的な多さ、中でもその半数の100例ほどが金沢市内で見られたことは注目できる。なお、北陸三県のうち従来から生活語以外での方言活用に積極的だったのが富山県で、山橋奈穂（2018）では都道府県及び市町村の公共的事業における方言活用事業数について富山県が全国3位の11例であることが報告されている。それに対して石川県は3例、福井県は2例という少なさであった。ただ、上の表の方言景観数はその多くが民間レベルのものであり、そのことが山橋（2018）での北陸三県の結果と大きく異なる傾向を示した理由と考えられる。

### 5.3 北陸三県の方言景観の具体例

以後、石川県、富山県、福井県の順に、北陸三県における方言景観の実例について「方言看板・方言キャッチコピー類」と「方言ネーミング・方言グッズ類」に分けて見ていく。まずは、写真とともに県庁所在地である金沢市、富山市、福井市の例（方言ネーミングの例）を1例ずつ挙げる。

数の上では先に表で見たように石川県と富山県・福井県の間には大きな差はあるものの、1990年代に比べて2000年代に入ると方言景観が徐々に増え始め、2010年代、とりわけ石川県金沢市で



写真1

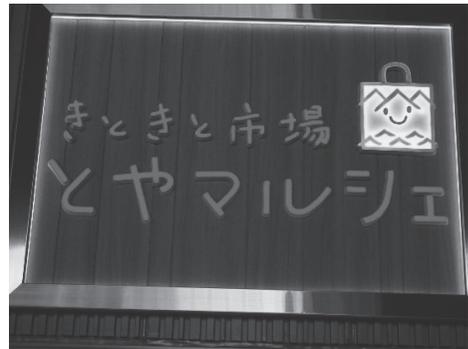


写真2



写真3

※写真1はJR金沢駅百番街の名称「あんと」（「ありがとう」の意味）、写真2はJR富山駅構内の食品街の名称「きときと市場 とやマルシェ」（「きときと」は「新鮮」の意味）、写真3はJR福井駅東口の公共ビルの名称「AOSSA」（「AOSSA（あおっさ）」は「会おうよ」の意味）

は北陸新幹線開業の2015年前後から急激に数を増やして、北陸地方でも方言の“見える化”が確実に進んできたと言えよう。筆者も加藤和夫（2014）で石川県の経済人に言語景観としての方言活用を提言したことがある。

### 5.3.1 石川県内の方言景観で用いられる方言の具体例

石川県の方言景観は数が多いためその代表例を示す。以下、下線を付した部分が方言形である。

#### A：方言看板・方言キャッチコピー類

##### (1) 方言看板

- いつもあんやと。近江町おいでたがなら よってくまっし（金沢市近江町市場入り口看板）
- 新鮮なんは当たり前 はみでるぐらい入っとるげん 来まっし見まっし食べまっし（近江町某海鮮丼店）
- がんこでかくて がんこ多くて がんこ新鮮で（近江町某海鮮丼店）
- いつもあんやと うまいもんあっさかいに よっていくまっし（近江町某海鮮丼店）
- 金沢の台所、近江町においでたがなら よってくまっし うまい魚やさかい 心意気にのせて 粋に盛りつけっさかい みてみまっし、たべてみまっし（近江町某海鮮丼店）
- やわやわ〜と行きまっし（金沢市内通学路看板）
- あんやとねえ〜 いんぎらっとしまっしい〜（近江町いちば館2階飲食店）
- 寄っていくまっし!! 小松のおみやげ（こまつ芸術劇場うらら売店看板）
- 「五郎島金時」は こっほこほで まんでうまいげん（さつま芋の宣伝幟）
- たったうめえ 加賀人の め〜らん屋（加賀市国道沿いラーメン店看板） ほか

##### (2) 方言キャッチコピー

- ちょっと食べてみまっし! ネギがいいがにに味を引き締めてくれるげんて これが金沢の味 お多福の味やし（金沢市内某うどん店）
- いらっし 見まっし 入るまっし（金沢市寺町土産物店）
- コッポコポの おいも たべまっし!!（五郎島金時入り袋）
- しなしな〜と見っかいね（金沢市内某デパート）
- ご注文の順番に作っておりみすけど 階下のお客さまのも作らんならんもんで 気のどくーやけど もうちょっこり まってたいね ほんまに お願いしみすわいね（金沢市内某飲食店）
- まんで うめえぞいね!!（金沢市内某スーパーマーケット）
- てんな、りくつな（加賀丸いも焼酎POP）
- 気〜つけてね（石川県交通安全運動キャッチコピー）
- 涼しいとこに つんだっていかんけ（いしかわクールシェア運動キャッチコピー）
- まずは体験してみんけ?（小松駅前外国語スクール）

- ここにしか売っとらんげんよ♪（北陸自動車道尼御前 SA 売店）
- しらみねおんせんに ござらっしゃれ（白山市白峰観光パンフレット）
- 入っていかっしゃれー まっちょるわいよ～ さいさいござれ～（白峰温泉総湯ポスター） ほか

## B：方言ネーミング・方言グッズ類

### (1) 方言ネーミング

- お茶に／お酒に 金箔入れまっし（お茶・酒に入れる金箔の名）
- 一福どう茶 金福茶 のんでみまっし（金箔入りお茶の名）
- 金沢よるまっし（WEB サイト 金沢文化施設みどころガイドの名称）
- これたべまっし（チョコクランチ菓子名）
- おいでまっし金沢（土産菓子名）
- きまっし金沢！よりまっし学園祭！！（金沢市内某専門学校学園祭名）
- 野菜ままっし麺（金沢市近江町ラーメン店メニュー名）
- あんと（金沢駅百番街の愛称）
- あんやと（豆腐名）
- 世界のあんやとまつり（金沢市内某専門学校学園祭名）
- aisorashi 〈あいそらしい〉（東茶屋街の指輪店名）
- いーじ～便（COOP 宅配車名）
- い～じ～（easy）パソコン教室（某新聞社文化センターの講座名）
- Zweigen 〈ツエーゲン〉金沢（サッカーチーム名）
- ほやさけ（東茶屋街の蕎麦店名）
- がんこうまい がんこおかき（おかき名）
- お芋くだい（さつまいもチップス名）
- うららの／たーたの／じゃあまの／にゃーにゃの あぶらとり紙（あぶらとり紙のパッケージ名）
- うまいがいね（野々市ヤーコン焼酎名）
- のらんけバス（輪島市コミュニティバス名）
- AGaiya 〈えーがいや〉（金沢駅構内スーパーマーケット・コーナー名）
- じょわもん（漬け物セット名）
- おんぼら～と（地域情報誌名 南加賀版）
- まいどさん（和菓子名）
- ただ、うめ～餅（小松の餅の商品名）
- みよっさ MIYOSSA（小松曳山交流館名）
- よろっさ（小松市「みよっさ」前の広場名）

- まんでとまと（能登のパスタソース名）
- のきゃまんじゅう（珠洲市和菓子店の菓子名） ほか

(2) 方言グッズ

- いじっかしい、あのおんね、がんこ、こそがしい、せんなん、他（金沢弁ネクタイ）
- あんやと、ちゃべちゃべと、おいね、がんばりまっし!、やるじ、他（金沢弁はんこ）
- あんやと、いいやろ、いいじ!（金沢ことばキーホルダー）
- 石川のがんこいいものストラップ（ストラップ、根付）
- もういいげん（方言靴下）
- おいでる、どんながや、ああはや、おこつくな、他（方言てぬぐい）
- 気合い入れんて、すっけいいぞいねー、いっぺん触ってんまっしー、他（方言てぬぐい）
- ごきみっあん、おてんこ、ほうやろう、たあたあ、まいどさん、他（加賀方言のれん）
- い〜じ〜、また来まっし、あんやと（金沢弁どら焼き）
- 金沢弁：あんやと、い〜じ〜、けなるい、がんこな、まいどさん、他／能登弁：たいそい、ねまる、もみじこ、ほっこりする、ちきない、他（石川方言菓子）
- ちきない、こうてくだー、きのどくな、いちゃけなー、じゃまない、他（能登弁スタンプ）

### 5.3.2 富山県内の方言景観で用いられる方言の具体例

#### A：方言看板・方言キャッチコピー類

(1) 方言看板

- ようこそ きときと富山へ（JR 富山駅きときと市場とやマルシェ入り口）
- きときとな大学やちゃ〜（富山大学研究振興課）
- 氷見新湊きときと魚（高岡市居酒屋看板）
- 四季折々の新鮮なネタ めいっばい楽しまれ（高岡市内居酒屋）
- 飲んでみらあれ（高岡市内酒店看板）
- 新鮮なネタ めいっばい楽しまれ（寿司店看板）
- また、来られ!!（寿司チェーン店看板）
- カギ かけんまいけ!（富山県安全なまちづくり推進本部） ほか

(2) 方言キャッチコピー

- パノラマキトキト富山に来られ、立山に来られ（観光ポスター）
- いっぺん乗ってみられ（富山地方鉄道ポスター）
- 食べられ〜富山（富山市 Acces QR ポスター）
- っかい食べて見られ（氷見鮮魚店の箱）
- しろえび壺番屋に寄ってかれ〜（射水市ポスター）
- 越中の美酒をのまんまいけ。（観光物産展地酒コーナー）

- 立山で富山の魅力 見つけんまいけ (富山大学内垂れ幕)
- 富山を楽しまんまいけ (某ビールメーカーのポスター)
- 自転車のカギ かけんまいけ! (富山県立某高等学校 PTA)
- 魚津に こっしゃい、蟹気楼見たけ?、洞杉どうけ?、祭り好きけ? (魚津市観光ポスター)
- 痛いやろ～つらいやろ～しびれる? 寄ってかれ! 楽になるよ～ (福光温泉施設 整体・足つぼ)
- 待っとっちゃ～♪ (富山地方鉄道旅ガイド表紙) ほか

## B: 方言ネーミング・方言グッズ類

### (1) 方言ネーミング

- きときと市場 とやマルシェ (富山駅構内土産品街名)
- Kit Kit Kitchen 〈きときとキッチン〉 (野菜用ソース・バーニャカウダ名)
- 富山きときと空港 (空港名)
- きときと食堂 (食堂名)
- 氷見きときと寿し (寿司店名)
- きときと市場 (射水市新湊市場名)
- ヨッテカーレ城端 (南砺市桜ヶ池農産物直売所名)
- カターレ富山 (サッカーチーム名)
- ちょっと寄り道 酔ってかれ (富山市内居酒屋名)
- こられんか (富山市内飲食店名)
- まいどはや (とやまコミュニティバス名)
- まいどはや (菓子名)
- よまんまいかー (富山市立図書館移動文庫バス名)
- Nemaru Café 〈ねまるカフェ〉 (新高岡駅近くの Cafe 名)
- ねまるちゃ (富山タウン誌名)
- 好きでならんちゃ (チョコレート菓子名)
- 元気やちゃ、懐かしいちゃ、若々しいちゃ、癒やされるちゃ (富山健康茶名) ほか

### (2) 方言グッズ

- つかえん、きのどくな (富山方言ハートせんべい)
- きのどくな、だいてやる、つかえん、またこられ、まいどはや、きときと、他 (富山方言菓子)
- おざし、たんたるき、じんのびない、かんねんへる、はんぐさ、とろっぺ、他 (氷見方言菓子)

### 5.3.3 福井県内の方言景観で用いられる方言の具体例

#### A：方言看板・方言キャッチコピー類

##### (1) 方言看板

- いっぺんうちで喰ってんでの（福井市片町の居酒屋店頭）
- いっぺん座ってみねの（越前市量販店家具売り場）
- い〜ざあ福井（JR 西日本福井地域鉄道部 駅構内垂れ幕）
- 福井に来たざあ!! いっぺん食べてみねのお（福井駅西口どんぶり屋・居酒屋店頭垂れ幕）
- しらんひとについていたら あかん！（越前市青少年健全育成標語）
- よ〜きたの（東尋坊駐車場入り口看板）
- 越前坂井 うららの極味膳（丸岡・一筆啓上茶屋駐車場）
- ようござんした ちょっといっぷくさんせ（おおい町コンビニ駐車場） ほか

##### (2) 方言キャッチコピー

- 福井のうまいもん食べていきねの（越前市内食堂店頭）
- おかえりなさい ゆっくりしていきねの（越前市内スーパーマーケット）
- 越前がにを食べに来てんでのお。（福井市観光ポスター）
- あおっさ いこっさ い〜ざ さかい（とうかい・北陸B-1グランプリ in 坂井 2016）
- 一杯やってこさ（焼き鳥屋）
- ハモろっさ 2017（アカペライベントのポスター）
- 見ておっけのお！（鯖江市・道の駅西山公園売店）
- つるつるいっばいのおもてなし（福井市もてなしキャンペーン）
- い〜ざあ福井 いつも〜買うてくれて〜 お〜きんの〜 おいしい飲みもん どうや〜（某飲料メーカーの方言自販機キャッチコピー）
- あったまるざあ（あわら市 あわら温泉屋台村 湯けむり横丁）
- 暑い中のご来店ありがとのお〜 ゆっくり買い物してつての（同上）
- よう〜来たつたの〜（北陸自動車道女形谷SA 上り売店）
- よう来たつたの。福井（丸岡県境看板）
- ようきてくんねした勝山（恐竜博物館土産入れポリ袋） ほか

#### B：方言ネーミング・方言グッズ類

##### (1) 方言ネーミング

- AOSSA 〈会おっさ〉（福井駅東口公共ビル名）
- のろっさ（越前市市民バス名）
- 乃もっ茶 〈飲もっさ〉（そば茶名）
- IKOSSA 〈行こっさ〉（金津本陣施設名）

- いこさ寄席（福井芸術・文化フォーラム 寄席名）
- お笑いつるつるイッパイ！！（越前市サマーフェスティバル 2008 ネーミング）
- HeRaSoSSa！！減らそっさ（福武線電車名）
- 太らん!? 麵（福井駅前ラーメン店メニュー名）
- iza イーザ（三国ショッピングワールド名）
- うららのドレッシング（ドレッシング名）
- もてら（大野市豆腐店の豆腐、豆乳デザート、豆乳飲料名）
- おもいでな、だんね、かたいけの、てなわん、おほこい（越前蒸し菓子名）
- あのの、ほやほや（土産菓子名）
- 登ってみねの福井の山（福井山歩会会誌名）
- たべね（菓子名）
- かすなもん（日本酒名）
- ほやって（越前米焼酎名）
- だんね原酒（本格焼酎名）
- ござんせ（おおい町土産菓子名） ほか

## (2) 方言グッズ

- てきねい、だんね、他（福井方言てぬぐい3種）
- ほやほや（福井弁ストラップ）
- ちかっぺ、けなりー、じゃみじゃみ、つるつるいっばい、おちょきん、他（福井弁Tシャツ）
- つるつるいっばい、じゃみじゃみ、だんね、おちょきん、けなるい、他（福井方言菓子）
- でも知ってるんやよ～（福井の言葉クリーナー） ほか

## 6. 北陸三県の方言景観に特徴的な方言形について—まとめにかえて—

ここでは最後に、前節で紹介した北陸三県の方言景観（方言看板・方言キャッチコピー」「方言ネーミング・方言グッズ」）に見られる方言形について、その特徴をまとめておく。

### 6.1 石川県

百万石文化を売りにしてきた石川県（特に金沢市）は、雅な文化とミスマッチとも言える方言を用いた方言景観が以前は少なかった。しかし、2000年前後から少しずつ増え始め、2015年3月の北陸新幹線開業前後から、金沢市を中心に方言景観が急増しつつある。

石川県では「～まっし」（本来、尊敬の敬語助動詞「まっしゃる」「まさる」の命令形で優しい命令の意だったものが、現在は「～なさい」「～ましょう」の意の文末詞と意識されている）の使用が最も多く、科研費調査の時点では、石川県の199例のうち81例（41%）に使用されていた。観光客によその土地に来たというエトランゼ感覚を味わせる効果を持つ方言景観において、「～な

さい」「～ましょう」にあたる文末詞「～まっし」は、その意味からも使いやすいということなのだろう。北陸新幹線開業前後から観光客を意識した方言景観が増加していることを考えれば、とりわけ「～まっし」が多用されるのも肯ける。

「～まっし」以外に比較的多いものに、「あんやと（ありがとう）」、「がんこ（とても）」、「いーじー（いいね）」、「～さかい、～さけ（～から）」、「～げん（～のだ）」などがある。

石川県の場合、数が多い中で、観光客ばかりでなく地元の人を意識した方言景観が富山・福井両県に比べて多い点にも注目できる。

## 6.2 富山県

北陸三県の中では比較的早くから、方言景観など、生活語以外での方言活用に積極的であった富山県であったが、北陸新幹線開業前後から数を増やした石川県に比べて目立たなくなった。

富山県の方言景観で多く見られる方言形は、石川県の「～まっし」に似た使われ方をする「れる・られる」敬語の命令形「～れ・られ」と魚介類などの「新鮮」を表す「きときと、キトキト」、である。

「れる・られる」敬語は共通語でも使われるが、共通語では命令形に当たる「～れ・～られ」は使われない。その体系の空き間を埋めて優しい命令、勧誘の意味で使用される。「～れ・～られ」に似た勧誘の「～ましょう」にあたる「～んまいけ」の形も比較的に見られる。

「きときと」は、富山県が氷見の鰯に代表される新鮮な魚介類のアピールに多用したため、石川県でも使われる方言形でありながら、今や富山県方言の代表のような印象を与えるまでになり、2012年には富山空港開港50周年を記念したネーミング「富山きときと空港」にまで用いられることとなった。

ほかに比較的多く見られたものに、「まいどはや（こんにちは）」、「～け（～か）」、「～ちゃ（～よ）」などがある。

## 6.3 福井県

北陸三県では従来から、生活語以外の部分での方言活用に最も消極的な県であったが、近年では全国的な方言見直しの動きの中で、方言景観も増えつつある。

福井県の方言景観で用いられる代表的方言形は、優しい命令「～なさい」の意の文末詞「～ねえ、～ね」（「～なさい」が「～なはい」→「～ない」→「ね（ー）」に変化）、勧誘「～ましょう」にあたる文末詞「～っさ」、文末のモダリティ表現（話し手の認識を相手にも認めさせる）「～ざあ」などであるが、石川・富山に比べて使用される方言の種類が多いことが特徴である。なお、近畿方言に似た特徴を持つ嶺南地方では方言景観はほとんど見られず、福井県の方言景観は嶺北地方に集中する。

なお、福井県は2020年秋から、某副知事の意向を受けて県の交流文化部を中心に方言を県のア

ピールに様々な活用していこうという取組がスタートし、筆者がそのアドバイザーを務めている。今後、行政レベルを中心に新たな方言景観が増加する可能性もあるかもしれない。

## 参考文献

- 井上史雄（2021）「社会と心に向かう言葉学① 買える方言 見る方言」、『日本語学』2021 秋号、通巻 506 号、明治書院、pp.110-111
- 井上史雄・大橋敦夫・田中宣廣・日高貢一郎・山下暁美（2013）『魅せる方言 地域語の底力』三省堂
- 内山純蔵監修／中井精一、ダニエル・ロング編（2011）『世界の言語景観 日本の言語景観—景色のなかのことば—』桂書房
- NHK 放送文化研究所（1997）『データブック全国県民意識調査 1996』日本放送出版協会
- 加藤和夫（1995）「隠れた方言コンプレックス」、言語編集部『変容する日本の方言』、『言語』95・11 別冊、24 巻 12 号、大修館書店
- 加藤和夫（2003）「北陸人の方言意識を探る—コンプレックスからの脱却をめざして—」、『北國文華』第 15 号、北國新聞社、pp.139-148
- 加藤和夫（2007）「第 8 章 方言」、鈴木一彦・林巨樹監修、飯田晴巳・中山緑朗編修『概説日本語学 改訂版』明治書院、pp.251-303
- 加藤和夫（2014）「〈街の考現学〉言語景観としての方言活用のススメ」、『金沢経済同友』Vol.111、金沢経済同友会
- 加藤和夫編（2019）『北陸地方の方言景観《資料集》』科学研究費研究成果報告書
- 言語編集部（1995）『変容する日本の方言』、『言語』95・11 別冊、24 巻 12 号、大修館書店
- 佐藤和之・米田正人編著（1999）『どうなる日本のことば—方言と共通語のゆくえ』大修館書店（加藤和夫他 10 名著）
- 真田信治（1987）『標準語の成立事情』PHP 研究所
- 柴田実（2001）「方言への愛着意識」、『日本語学』20 巻 8 号、明治書院
- 庄司博史／P・バックハウス／F・クルマス編著（2009）『日本の言語景観』三元社
- 田中宣廣（2016）「方言の拡張活用と方言景観」、井上史雄・木部暢子編著『はじめて学ぶ方言学—ことばの多様性をとらえる 28 章—』ミネルヴァ書房、pp.274-283
- 谷沢香織（1998）「北陸地方における方言意識の研究」金沢大学教育学部 平成 9 年度卒業論文
- 日高貢一郎（1996）「方言の有効活用」、小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎編『方言の現在』明治書院、pp.362-384
- 三谷真須美（1997）「方言意識から見た福井県方言の位置」金沢大学教育学部 平成 8 年度卒業論文
- 宮下梨乃（2016）「福井市における方言意識の変容」金沢大学人間社会学域国際学類 平成 27 年

度卒業論文

諸谷志奈子（2000）「石川県方言話者における言語意識」金沢大学教育学部 平成 11 年度卒業論文

山橋奈穂（2018）「都道府県及び市町村の公共的な事業における方言活用」金沢大学人間社会学域国際学類 平成 29 年度卒業論文

※本稿は平成 28～30 年度 科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号：16K02721）「北陸地方の方言景観に関する社会言語学的研究—方言景観の多様性とその要因解明—」〈研究代表：加藤和夫〉の研究成果の一部である。